

## 十三歳

今日も一人きりだ……。

白いコンクリートが固く足裏に響く階段をのぼり、分厚いステンレスの茶色のドアの前に立ち、ひよつとしたら、おかえり、と声が返ってくるという幻想を振り払って、カギ穴にキーを差し込む。

ドアを開けると、目の前に巨大な空虚が広がる。

校門を出てから、ずっと握りしめていたケータイの画面を見つめる。

早く鳴って……。

ママが帰ってくるのは十時半くらいだろう。大事な打合せがある。ちらかった食卓に無愛想に載せられたお皿からちよつと焦げすぎの食パンをつまみ、ゆつくりと口に運んでいた私の肩こしに、そう声をかけてママは出ていった。ちよつと派手なスーツに身を固めて。

ひたすら、例の着メロを待つ。

着信音が響いたら、十時半まで、時間の流れを忘れることができる。

もし鳴らなかったら、あと四時間、胸の奥から突き上げてくる痛みを押し殺しながら、過ごすことになる。

ママとパパが離婚して一年。ママは運良く、私が生まれる前に在職していた会社に雇われた。ママを気に入ってくれた上司が、人事を担当する部署にいたからだろうだ。

もう中学生でしょ。一人でお留守番できるよね。

初めて出社する日、ママは私の肩に手を置いて、そう言いながら、目をのぞきこんだ。黒い瞳が不安に揺れていた。目をそらして、顎を少し引くと、ママは大仰に喜び、私の背中に両手を回し、むかしよくやってくれたように、私の体を揺すぶった。

ママは大きい。パパより背が高い。私はパパに似てちび。クラスの三分の二を占めるブラを付けた女の子が羨ましい。

なかでもアヤは、歩く度に白いブラウスの下で、膨らんだ乳房が上下に揺れているのがはっきりと分かる。男子生徒の冷やかかしにも、彼女は負けない。160センチを越える長身。長いすりとした脚。朝は六時に起きて、入念にソバージュの髪を手入れするんだとか。

鳴った。

「مامィ。すぐ出られる？」

「うん、大丈夫だよ」

「タカハシ、来るってさ。ちよろいよ」

「マジ？」

「……まさかビビってんの？」

「……………」

「ナメられたら、おしまいだよ。言ったじゃん」

「うん。わかってる……」

「じゃ、ソッコーで来いよ」

タカハシは、バスケット部の顧問。もともとバスケットやったことはあんまりないって、小学校のときミニバスをやっていたコが言ってた。

三十五才。独身。わりかし可愛い顔してるけど、それだけ。

最初はいいやつかと思った。

「مامィ、大変だったな」

ママとパパが離婚した直後、いつも俯いていた私に、そっと声をかけてくれた。

それが優しさからではなかったことは、二カ月後に気づいた。

「おまえ、自分で分かってないみたいだけど、結構、男から見たらイケてるよ」

学校中の男子の視線を集めるアヤから、そんなことを言われたとき、私は思わず、数ミリやっところさ隆起した胸を両手で押さえた。タカハシの視線に、なにかいやらしいものが混じりはじめ

たことを、なぜか私を庇ってくれるアヤに相談したときのことだ。

「ブスじゃなくて、つけこみやすそうな気配、濃厚だからさ」

「どういうこと？ 蚊の鳴くような声で訪ねた私に、アヤは無遠慮だった。」

「おまえ、タカハシから誘われて、断れる？」

「たぶん、断らない。咄嗟の言い訳が出てこなくて、ついていってしまいそうな気がする。」

「凶星だろ？」

アヤは鋭い。私の気持ちが手にとるように分かるらしい。

「マミのこと、なんか気になるんだよ」

「ぼったり、人けのない廊下で鉢合わせしたとき、タカハシに肩を抱かれたのは、三日前だった。」

「パニクった。二十四時間悩んで、アヤに打ち明けた。」

「任せな」

アヤは、私の背中をそっと抱きしめて、耳元で囁いた。アヤの鼻息が、かすかに乱れていたけれど、イヤじゃなかった。ずっと抱かれていたかった。

アヤの、たつぷりと膨らんだブラの感触が、私の薄っぺらい胸板に伝わってきた。触ってみた、ふと思った。

アヤは私と同様、パパがいない。ママとは、チガツナガツテイナイ、そうだ。

アヤのママは、六時に出勤する。それから、私のママが帰ってくるまでの四時間、3LDKのマンションは、私とアヤがふたりつきりで占領する。

アヤは、私が知らないいろんなものを見せてくれる。

私が、男と女はどうやってセックスするか知っているのは、アヤが彼女のママの部屋からそっと持ち出したビデオを再生してくれたからだ。

私が、男の生殖器の形状を、平面図ではなく、立体で知っているのは、アヤが彼女のママのクローゼットの奥から、水色で透明な、それに似せた器具を、取り出して見せてくれたからだ。

「これなんだか、分かる？」

彼女は、ピンクの花柄のビニールクロスをかけたテーブルに並んだ、黒っぽいものと、私の顔を見比べながら言った。

ムチ？

そ。

ロープ……。

そ。

これは？

「猿ぐつわ。口にはめると、喋れなくなるの。」

アヤのママの持ち物だ。

どうやって使うか、わかるよね？

タカハシに？

そ！

三十分後。チャイムが鳴った。

アヤは、ドアを開けに玄関にゆっくりと向かった。私は、五秒ほどずらして椅子から立ち上がり、そつとリビングのドアを開けて、灰色の絨毯を敷きつめた細い廊下の向こうの玄関を見つめた。

ドアが開いた。

赤いジーンズに、盛り上がった筋肉を誇示するびったりとした白いTシャツ。

タカハシが、よ、と右手をあげ、そのくせ、どこか視線の定まらない顔をアヤに向けた瞬間、小柄なその体が、アヤの影に隠れた。

アヤの右足がはねあげられていた。

つぶいてタカハシのうめき声。

アヤが、男の急所を蹴り上げる場面を見るのは三回目だ。

一度目は、二人で夜の街をうろついでいて、酔っぱらったサラリーマンに抱きつかれたとき。

二度目は、あれ、もう一度やってみせようか、と屋上にいじめられっ子の男子を呼び出したと

き。

アヤの長い脚が折り曲げられ、かわいらしい膝小僧が、脚と脚とのつけ根にのめりこんだ瞬間、相手の男は、いまにも嘔吐しそうな表情で、両手で股間を押さえて、うずくまる。そのまま動けず、涙を流して、歯を食いしばる。

あんたもやってみなよ。簡単だよ。

アヤはそういうけど、アヤだからできるんだ。

「ちよつと、見てないで、ロープもってきてよ！」

アヤが私の方を振り返って叫ぶ。

タカハシは、玄関に横倒しに倒れて、股間を両手で押さえ、目をぎゅゅとつむっている。

「ほら！」

もう一度怒鳴られて、私は弾かれたようにテーブルに置かれたロープをつかんで、廊下を走り、右手を精一杯のばして、アヤに渡す。

アヤは、タカハシをうつ伏せに転がし、背中に馬乗りになり、両手を後ろにねじあげて、手首を交差させてぐるぐる巻きにする。

「おら、立てよ！」

アヤの爪先が、タカハシの肋骨に食い込む。

タカハシの鋭い鳴き声が迸る。

ひざ小僧に、二つの肉の固まり。

三度目だった。一回目と二回目は、そこじゃない場所に当たった。アヤに促され、やっと私の膝小僧は、タカハシの睾丸をとらえた。

柱に縛りつけられ身動きのできないタカハシは、すでにさんざん、アヤに急所を蹴られていた。必死に首を振り、涙を流して何か訴えようとするが、猿ぐつわをはめられているため、言葉にならない。

「な、簡単だろ？」

アヤは、タカハシの耳たぶをつかみ、怒鳴った。

「マミにもっぺん触ってみ。金玉、潰してやるよ！」

間に合った。

すでに十一時近かった。ドアを開け、なかは真つ暗で、まだママが帰っていないのにほつと胸を撫でおろした。

いつもは巨大な、薄暗い空っぽの洞窟のように見えていたマンションが、実は、赤や青やピンクや茶色、黄色、三種類の濃淡鮮やかな緑色、さまざまな色が混ざっていたことに気づいた。

冷蔵庫から紙パックのパイナップルジュースを取り出し、壁にもたれてじかに口をつけて飲み

干した。右の膝をたてて、左手で抱え込み、ゆっくりと指でなぞった。

私にも、変えられる。

そう口に出して呟いた。

タカハシは泣いていた。ごめんよ、ごめんよ、と謝りながら、足をひきずるようにして出ていった。

その後ろ姿を見ながら、涙がなぜか零れた。

ちっとも嬉しくなかった。

自分がイヤでイヤでたまらなかった。

アヤに肩を抱かれた。アヤの胸に顔を埋めて思い切り泣いた。

泣くのは、一年ぶりだ。パパから、もう会えないと宣告されたとき以来だった。

そんなに長いこと泣いていなかったことにやっと気づいた。

アヤのTシャツがべとべとになった。ふと目をあげた。乳首がくつきりと、Tシャツ越しに映っていた。そこに、十分以上、顔をくっつけていたことを知ったとき、やっと、胸の奥に押し殺していた痛みが、溶けてゆくのが分かった。